吉橋の庚申塔について

蕨　由美

1　はじめに

庚申待は、60 日に 1 回庚申の夜に、眠った人間の体から三尸が抜け出し天帝にその人の罪過を告げられないよう徹夜するという道教に由来した信仰で、室町時代ごろから庶民にも浸透して庚申講が行われるようになると、その供養の証しとして「庚申塔」を建立する風習が、江戸時代、各地に定着した。

吉橋地区には、江戸時代前期から昭和 43 年銘までの庚申塔が 36 基あり、特に高本八幡神社の万治三年（1660）銘の庚申塔をはじめ、正徳六年（1716）銘まで江戸時代前期の庚申塔が 4 基ある。

これらの庚申塔は、阿蘇郷土研究サークルが調査し、1996 年刊行の『よなもと今昔』*1.で報告され、その成果は『八千代市の歴史　資料編　近代・現代Ⅲ　石造文化財』の一覧表*2.にも所収されているが、像容の写真や多数の人名の銘文は掲載されていない。

今回、蕨由美・鈴木千代・牧野光男・中島和子・稲山隆子・藤村誠枝・宮井雄二の会員で、これらの庚申塔 36 基の人名の銘文判読などを試み、その詳細な記録を調査カードにまとめ、平成 26 年度八千代市民文化祭「ふるさとの歴史展」で供覧に呈した。

本誌面では、その概要と人名銘文、特徴ある庚申塔の事例を中心に紹介する。

2　吉橋の庚申塔の概要

旧吉橋村は、花輪・高本・尾崎・寺台の 4 つの集落で構成され、庚申塔は現在、花輪八幡神社に 12 基、高本八幡神社入り口に 9 基、寺台の西芝山三叉路路傍に 6 基、尾崎は大師堂に 4 基と芝山の路傍に 5 基が所在する。

今回は全銘文の読み取りと、石塔の法量計測、写真撮影による像容や字体の特徴の把握を行い、1 基ずつ調査カードを作成した。

表 1.とグラフは、各集落・時代別の庚申塔数、表 2.は全 36 基の内容の概要、表 3.は塔に刻まれた複数人名の銘文一覧である。

表 1.　吉橋地区の集落・時代別の庚申塔数

	前期	中期	後期	近代	現代	計
花輪	1	6	3	1	1	12
高本	1	4	3	1	0	9
寺台	0	3	2	1	0	6
尾崎	2	3	3	1	0	9

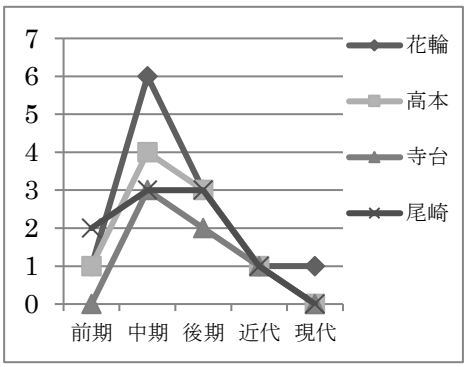

表 2.　吉橋地区の庚申塔の内容一覧

No.		所在地	造立 年月日	西暦	像容	形状	銘文
年順	市史						
1	1	高本八幡神社入口	万治 3・10･吉	1660	三猿	笠付角柱型	為庚申待現当二世悉地成就処　講人数十八一結諸衆敬白(人名 18)
2	5	尾崎大師堂	延宝 6・10･12	1678		笠付角柱型	奉造立庚申供養所願成就処敬白(人名 20)
3	9	尾崎大師堂	元禄元・11･吉	1688		笠付角柱型	②　奉造立青面金剛庚申結衆二世安穏所　如我昔所願今者己満足化一切衆生皆令入仏道
4	24	花輪八幡神社	正徳 6･2･吉	1716	青面金剛	笠付角柱型	吉橋村　同行二十三人
5	26	花輪八幡神社	享保 4･2･大吉	1719	青面金剛	笠付角柱型	③　奉造立庚申供養講中所願成就　敬白　(人名 38)
6	32	高本八幡神社入口	享保 11・11･20	1726	青面金剛	笠付角柱型	⑤　奉造立庚申人救二世安楽攸　下総国千葉郡吉橋村内高本村(人名 27)
7	39	寺台字西芝山	享保 14・2･16	1729	青面金剛	笠付角柱型	⑦　奉造立庚申　二世安楽攸　(人名多数)
8	41	花輪八幡神社	享保 14・10･吉	1729	青面金剛	駒型	②　奉造立庚申一宇二世安楽処　吉橋花わ　同行廿五人
9	45	花輪八幡神社	享保 17・10･吉	1732	青面金剛	笠付角柱型	③　奉造立青面金剛庚申吉橋村　(人名 36)
10	55	高本八幡神社入口	元文 4･2･8	1739	青面金剛	光背型	奉供養庚申講中　施主敬白為二世安楽也(人名 17)
11	62	花輪八幡神社	延享 2･2･吉	1745	青面金剛	笠付角柱型	奉造立庚申講諸願成就所吉橋村　はなわ(人名 31)
12	67	尾崎字芝山	延享 3・11･吉	1746	青面金剛	笠付角柱型	奉供養庚申請願成就之所同行五十三人
13	73	寺台字西芝山	寛延 4･2･吉	1751	青面金剛	笠付角柱型	奉造立青面尊像一躰庚申講中吉橋村寺台　(人名 18)

14	86	高本八幡神社入口	宝暦 9・10･吉	1759	青面金剛	駒型	講中廿六人
15	96	寺台字西芝山	明和 2･2･吉	1765	三猿	笠付角柱型	③　青面金剛尊　寺台講中廿八人
16	110	花輪八幡神社	安永 4・12.吉	1775	青面金剛	笠付角柱型	奉造立青面金剛　花輪講中
17	129	高本八幡神社入口	寛政 6・11･吉	1794	三猿	駒型	③　青面金剛王(人名 16)
18	138	花輪八幡神社	寛政 12･11･吉	1800		駒型	③　青面金剛　吉橋村　花輪講中三十二人
19	143	尾崎字芝山	享和 3・10･吉	1803	三猿	駒型	青面金剛王　吉橋村　四拾七人　講中
20	155	花輪八幡神社	文化 6･2･吉	1809	三猿	駒型	奉納青面金剛三千体諸願成就攸　天下和順日月清明下総千葉郡吉橋村小川市良兵衛
21	149	寺台字西芝山	文化 13･2･吉	1816	三猿	駒型	青面金剛王　　寺台
22	179	高本八幡神社入口	文化 15･4･吉	1818	三猿	駒型	青面金剛王　高本講中(人名 19)
23	206	尾崎字芝山	文政 10･2･吉	1827		駒型	庚申塔　(人名 9)
24	222	花輪八幡神社	天保 3・11･訶日	1832		駒型	庚申塔　花輪台　講中
25	226	尾崎大師堂	天保 5・11･吉	1834	三猿	駒型	庚申塔　尾崎台　講中
26	231	高本八幡神社入口	天保 9･3･吉	1838		駒型	庚申塔　(人名 18)
27	251	寺台字西芝山	弘化 3・11･吉	1846		駒型	庚申塔
28	252	花輪八幡神社	弘化 4･2･吉	1847		駒型	庚申塔　花輪講中
29	303	尾崎大師堂	文久元・11･吉	1861		自然石	庚申塔　尾崎台　講中

30	304	高本八幡神社入口	文久元・11･吉	1861	三猿	駒型	庚申塔　村講中(人名 20)
31	341	尾崎字芝山	明治 17･10･吉	1884		駒型	庚申塔（人名削除の跡あり）
32	345	花輪八幡神社	明治 18･12･吉	1885		駒型	庚申塔　講中
33	349	高本八幡神社入口	明治 20･11･吉	1887	三猿	駒型	庚申塔　当邨講中
34	359	寺台字西芝山	明治 27･5･吉	1894		駒型	庚申塔　西たかもと　かまがや　東かや田　南大和田　新田　船橋　道　寺台　世○人　(人名多数)
35	418	花輪八幡神社	昭和 43･11･10	1968		平石型	庚申塔　花輪講中　明治百年記念
36	427	尾崎字芝山	不明	(1778)	青面金剛	笠付角柱型	吉橋村　尾崎講中　戊

表 1.～3.の注

1）下線は、『八千代市の歴史　資料編　近代・現代Ⅲ　石造文化財』*2.（以下『市史』と表記）との相違点を示す。

2）銘文の丸数字は梵字で、『市史』の付録の「石造文化財一覧表中の梵字凡例」による。
②と③は「ウーン」、⑤は「カーン」、⑦は「ア」を表す。

3）時代区分は、筑波大学での日本美術シソーラスで使われた下記「時代区分」による。
江戸時代 前期＝1615～1716 、中期 ＝1716～1804、後期＝1804～1868、
近代＝1868～1945、現代＝1945～

4）所在地について『市史』の表では、「高本八幡神社」と「高本八幡神社入口」の二つの記載があるが、すべて「高本八幡神社入口」である。ただし本文と他の表では「高本神社」または「高本」と略す場合がある。また、宗教法人名は「八幡社」である。

5）造立年代不明の No.36 については、「戊」の銘、形状や像容の考証から、安永 7 年（1778）と推定し、江戸時代中期に区分した。（本文 6 参照）

6）「○」は判読不明の文字を示す。

7）No.34 の人名は判読不明のため、表 3.には記載していない。

表 3.　吉橋地区の庚申塔に刻まれた複数人名の銘文一覧表

所在地：高本八幡神社入口						
造立年銘						
万治 3	享保 11	元文 4	寛政 6	文化 15	天保 9	文久元
(1660)	(1726)	(1739)	(1794)	(1818)	(1838)	(1861)
○七郎	長十郎	○○○	茂右エ門	安原　九右エ門	三右エ門	安原　五兵エ
勘十郎	勘九郎	久○○	祐蔵	湯浅　四良右エ門	四良兵エ	湯浅　四郎右エ門
甚四郎	半四郎	善○○	新平	安原　勘左エ門	五良左エ門	安原　勘左エ門
五郎	孫八郎	○○○○	次郎兵衛	安原　半兵エ	七良左エ門	安原　傳兵エ
三郎右エ門	森右門	源(兵)○	新蔵	安原　傳兵エ	市左エ門	安原　傳三良
新十郎	六之助	己○(郎)	源蔵	近藤　与兵エ	常右エ門	近藤　与兵エ
惣七	山三郎	紋四郎	佐右エ門	湯浅　源治良	九良左エ門	湯浅　源治良
半左エ門	猪之助	權○○	稲吉	湯浅　庄兵エ	三良兵エ	湯浅　庄兵エ
六左エ門	市三郎	庄次○	峯吉	湯浅　源助	五兵エ	湯浅　權平
彦次	權之丞	平○○	佐七	安原　四良兵エ	勘左エ門	湯浅　三左エ門
吉兵衛	權四郎	垚○○	清右エ門	中村　七郎左エ門	半兵エ	中村　九良左エ門
市左エ門	益五郎	半四郎	佐平次	湯浅　庄右エ門	傳兵エ	湯浅　三良兵エ
庄十郎	傳三郎	八之丞	権平	湯浅　三郎兵衛	傳三良	安原　四良兵エ
四郎右エ門	三右○	善九郎	太左エ門	湯浅　長右エ門	与兵エ	中村　七良左エ門
○○	藤三郎	傳四郎	半兵衛	中村　五良左エ門	源治良	安原　半兵エ
惣十郎	助之丞	垚○○	七蔵	中村　九良右エ門	庄兵エ	湯浅　三右エ門
惣九郎	金兵衛	半四郎		湯浅　源平	三左エ門	湯浅　七良兵エ
新蔵	○○郎			中村　要蔵	七良兵エ	湯浅　市左エ門
	助三郎			中村　仙之助		湯浅　長右エ門
	勘十郎					中村　五良左エ門
	半三郎					
	徳兵衛					
	平三郎					
	十三郎					
	長次郎					
	岩松					

左写真 1. 高本・万治三年銘庚申塔　左面拓本右写真

2. 同・正面下部拓本

所在地：花輪八幡神社					
享保 4　(1719)		享保 17　(1732)		延享 2　(1745)	
新五兵衛	七郎兵衛	善三郎	𠮟左エ門	儀右エ門	久三郎
權三郎	治郎兵衛	傳三郎	五右エ門	伊三郎	三右エ門
清十郎	金左衛門	十三郎	磯右門	五右エ門	勘太郎
傳三郎	半右衛門	七郎兵衛	○五兵衛	文次郎	久五郎
勘十郎	七郎左衛門	新之丞	長七郎	𠮟三郎	長三郎
吉重郎	長九郎	勘十郎	八右門	源三郎	儀五(郎)
八郎兵衛	平治郎	平次郎	勘拾郎	吉次郎	權次郎
岩右衛門	武左衛門	十治郎	栄四郎	勘○郎	平七
治兵衛	長三郎	小平○	○次郎	勘四郎	清蔵
弥右門	甚重（郎）	市郎兵衛	吉平	權三郎	勝四郎
忠兵衛	勘左衛門	○之丞	傳兵衛	源次郎	長五郎
貞右衛門	長拾郎	三之丞	○○○	久四郎	源五郎
市兵衛	○兵衛	○○左門	平治郎	庄兵衛	
友右衛門	五右衛門	金三郎	傳○	傳三郎	
甚三郎	源十郎	忠兵衛	七三郎	長四郎	
九郎兵衛	○○○	吉三郎	○平次	善五郎	
市郎兵衛	三郎右衛門	久三郎	半十郎	八蔵	
長五郎	清三郎	磯平		清三郎	
半三郎	○○○	長三郎		源四郎	

寺台字西芝山				尾崎大師堂		尾崎字芝山
享保 14　(1729)		寛延 4　(1751)		延宝 6　(1678)		文政 10 (1827)
七兵衛	久四郎	源次郎	与市	良兵衛	𠮟左エ門	六右エ門
源左門	○兵衛	嘉平治	文右門	權左エ門	惣三郎	八郎兵エ
作左右門	○三郎	源七郎	庄右門	弥右エ門	半蔵	久藏
文左右門	三○郎	金左門	神観房	作左エ門	弥七郎	五右エ門
金三郎	勘左右門	市兵衛	勘兵衛	作右エ門	勘左エ門	喜左エ門
○兵衛	權十郎	市三郎	新五郎	清右エ門	作兵衛	武左エ門
○四郎	文四郎	伊兵衛	傳三郎	七左エ門	秀清	升右エ門
助五郎	金兵衛	長重郎	安五郎	次右エ門	道登	七良左エ門
○兵衛	吉右門	半四郎		甚七郎	道保	嘉兵エ
善四郎	安右門	久左門		○○○		

3　市内最古の高本の万治三年（1660）銘庚申塔

高本八幡神社入口に並ぶ庚申塔群の右端の笠付角柱型の塔（写真 3.）は、総高 140 ㎝、笠と塔身は一石で彫りだされ、水鉢付の台座に載る。光背型の輪郭内に三面に三猿を一匹ずつ浮き彫りし、上部に「万治三天庚子十月吉日　為庚申待現當二世悉地成就処　講人数十八一結諸衆　敬白」、猿の下に 18 名の人名（表 3.　写真 1.2.）を刻んでいる。『市史』*2 では、下線部は「諸救十八結諸衆」となっているが、拓本（写真 4.）を採って確認した結果、「講人数十八一結諸衆」と記されてあり、「講」の「人数十八」人が「一結」すなわち、仏と結縁することにより「現当二世悉地成就」されることを意味する願文であった。銘文の上には、薬師如来を表す梵字バイとも思われる線彫りがあるが、不鮮明であり、また主尊の特定に関することなので、その判読は今後慎重に検討したい。

この笠付角柱の三面に猿を配し願文を刻した庚申塔の形は、その後、萱田の飯綱神社下の延宝元年（1673）銘の庚申塔（写真 5.）、天和二年（1682）平戸字道地と島田字通原の日蓮宗系題目庚申塔に継承され、遠方では、木更津市吾妻神社の延宝八年（1680）の道標付庚申塔*3.がある。

それらの初源となるこの高本の万治 3 年銘庚申塔は、八千代市域の庚申塔 432 基中で最古であると同時に、千葉県内外でも近世初期の庚申塔萌芽期の代表的な石造物として、貴重である。

写真 3. 高本・万治三年銘庚申塔

写真 4. 同拓本

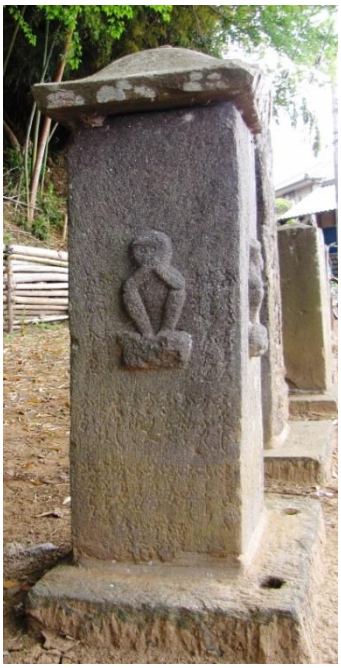

写真 5. 萱田飯綱神社下・延宝元年銘庚申塔

青面金剛が主尊に定着する以前の庚申塔には、観音や地蔵などの諸仏に庚申信仰を表す銘のあるものや、願文のみか、一猿ないし三猿を浮彫りした板碑型など様々な形態がある。千葉県では、浦安市大運寺の正保三年（1646）銘の三猿が付いた聖観音像塔*4.が古く、船橋市古作道には寛文十年（1670）銘の薬師如来像の庚申塔がある。地蔵信仰と集合した近隣の例では、佐倉市先崎に「慶安三年（1650）奉造立庚申」銘の延命地蔵尊丸彫り像*5.があり、八千代市内では神野の旧薬師堂跡には、「延宝二年（1674）庚申待為」銘の光背型地蔵像塔がある。一猿が付いた板碑型では、佐倉市上座に延宝三年（1675）銘の庚申塔*5.がある。

4　尾崎大師堂の 2 基の江戸前期文字塔

尾崎大師堂の延宝六年（1678）（写真 6.）と元禄元年（1688）（写真 7.）銘の庚申塔 2 基は、ともに未敷蓮華の浮彫で装飾された大型の笠付角柱型石塔で、主尊や三猿などの像容を刻まない文字塔である。

延宝六年塔には、正面に「奉造立庚申供養所願成就処　敬白」、裏面に 20 名の名前が刻まれている。元禄元年塔には、「奉造立青面金剛庚申結衆二世安穏所」などの銘文があり、青面金剛が庚申信仰の主尊であることがわかる。

八千代市で青面金剛の像容を持つ庚申塔は、大和田新田字一本松前の延宝二年（1674）銘の「高津村施主」の塔が初出で、宝永期（1704～）にはほとんどが青面金剛像塔になる。元禄年間は、「庚申」銘のある三猿塔から青面金剛像塔への移行期であるが、尾崎の江戸前期の「青面金剛」銘の文字塔は、八千代市内はもちろん北総でもまれである。

写真 6. 尾崎大師堂・延宝六年銘の庚申塔

写真 7. 同所・元禄元年銘の庚申塔

5　青面金剛像を刻む庚申塔 13 基の像容

吉橋で青面金剛の像容を刻む庚申塔の初出は、花輪八幡神社の正徳六年（1716）銘の笠付角柱型の石塔で、以後、江戸中期までの庚申塔 14 基のうち、造立年推定を含め 13 基の塔に青面金剛像が刻まれている。

青面金剛はもと流行病を流行らせる悪鬼であったが、のち改心して病魔を駆逐する善神になったという仏教説話が、鎌倉時代の「渓嵐拾葉集」にあるという。「陀羅尼集経九大青面金剛呪法」による儀軌では、「一身四手」で「身体青色、口を張り牙を出し、真っ赤な目をもつ・・」とあるが、二手を合掌し宝輪・矛・弓・矢を持つ六臂像と、合掌せず右手に人身（ショケラ）左手に剣を持つ六臂像が一般的で、さらに日月・二鶏・三猿・邪鬼、まれに二童子が付くことが多い。*6.

花輪八幡神社の正徳六年塔（写真 8.）は、合掌型六臂青面金剛像で、邪鬼はまだ登場していない。三猿は正面向きでダイヤ型が 3 つ幾何学的に連なり、笠の上には宝珠が載る。

この 3 年後の同じく花輪八幡神社の享保四年（1719）銘庚申塔は、足元に左向きの下帯姿の邪鬼を踏む典型的な青面金剛像塔である。

合掌型六臂青面金剛像は吉橋には 10 基あり、中でも花輪の延享二年（1745）銘の庚申塔（写真 9.）は、三猿や邪鬼なども含め写実的で丁寧な彫刻の優品である。

また、寺台の寛延四年（1751）銘塔（写真 10.）も、力強く迫力のある優れた彫像で、怒髪が冠のように高く広がり中央に髑髏を刻む姿と笠の破風の桔梗紋は、勝田字新山の延享二年（1745）銘塔（写真 11.）との関連を感じさせる。

写真 8. 花輪・正徳六年庚申塔

写真 9. 花輪・延享二年銘庚申塔

写真 10. 寺台・寛延四年銘庚申塔

写真 11. 勝田字新山・延享二年銘庚申塔

剣と人身（ショケラ）を持つ六臂の青面金剛像は、寺台の享保十四年（1729）銘塔（写真 12.）で、両側面に開敷蓮華を浮彫りする笠付角柱型である。

一方、尾崎字芝山の延享三年（1746）銘塔（写真 13.）と高本の宝暦九年（1759）銘（写真 14.）塔は、右手に人身の頭部らしき袋状のものを持つ。主尊の目がいわゆるアーモンド形で、宝輪を持つ手が直角で水平に伸び、迫力がない邪鬼がうずくまる。三猿は両端横向き、中央が正面向きで、前者の尾崎の塔は台座に一列、後者の高本の塔は塔身下部に三角形に配置する。この特徴を大畠洋一氏が「生首持ち型青面金剛」と提起*7.、さらにこの青面金剛像塔が印旛・手賀沼周辺に 114 基以上あり、時代も享保 3 年（1718）から宝暦 12 年（1762）の 44 年間に限定され、この時期の青面金剛像塔の 25%を占めるということが、石田年子氏により最近報告*8.されている。

写真 12. 寺台・享保十四年銘庚申塔

写真 13. 尾崎字芝山・延享三年銘庚申塔

写真 14. 高本・宝暦九年銘庚申塔

6　尾崎字芝山の「戊」銘庚申塔の推定造立年

尾崎字芝山に江戸中期と推定される優れた像容の合掌型六臂青面金剛像（写真 15.）があるが、残念ながら、造立年銘は右側面に「戊」の字のみしか残存せず、『市史』でも造立年月日不明となっている。

この塔は、笠付角柱型で、主尊の像容は冠状に V 字に分かれた髪の中央にとぐろを

巻いた蛇があり、顎を引いたやや穏やかな顔をしている。おっとりとした表情の邪鬼の下には、中央に烏帽子をかぶり御幣を担いで踊る猿の立像、その両端に雄鶏雌鶏を配置する一猿二鶏の構図である。

写真 15. 尾崎字芝山・「戊」銘庚申塔

写真 16. 船橋市覚王寺・安永五年銘庚申塔

類似事例を探すと、笠の形状、青面金剛像と邪鬼の像容が、船橋市本町の覚王寺の安永五年（1776）銘の庚申塔（写真 16.）に類似している。*9. 特に、丸みを帯びた穏やかな造形は安永年間に多い。また 一猿二鶏の構図は寛文 4 年（1664）足立区から元文 5 年（1740）群馬県白沢村の作例*10.があり、烏帽子をかぶり御幣を担いで踊る猿の立像は、寛文～安永期（1660～1780）に関東各地で散見される。

以上を総合すると、安永年間であることは確実で、残された「戊」の十干から該当する戊の年は、戊戌年の安永 7 年（1778）である。この安永 7 戊戌年の造立年が確実であれば、吉橋において像容を持つ庚申塔 13 基の最後を飾るにふさわしい像ということになる。

7　江戸後期から現代までの文字塔の変遷

寺台の明和二年（1765）「青面金剛尊」銘の文字塔 1 基以外、安永年間以前の庚申塔はすべて青面金剛像塔であるが、寛政 6 年（1794）以降は三猿のみを施した駒型の「青

面金剛（王）」銘の文字塔に変化し、文政 10 年（1827）以降は主尊名もなく「庚申塔」銘だけの文字塔となる。

「青面金剛」銘のころの文字塔は、篆書風の書体や異体字の使用など凝ったものがあり、特に高本の文化十五年（1818）「青面金剛王」銘の庚申塔（写真 17.）は、その特徴が強い。

また、この庚申塔には、氏名（苗字と名前のセット）で、人名が記されてあり、同じく高本の文久元年（1861）「庚申塔」銘の塔も氏名が記載されている。

近代では、寺台の明治二十七年（1894）「庚申塔」銘文字塔右側面に、「西たかもと　かまかや　東かや田　南大和田新田　船橋道」の道標銘が刻まれてあり、ここが鎌ヶ谷や船橋へ通じる重要な三叉路であったことを示している。*11.

現代の庚申塔は、花輪の昭和四十三年（1968）の「明治百年記念」の 1 基のみで、費用負担も「納税組合」と「長寿会」と記され、平石型記念碑の形をとっている。

以上のような文字塔の変遷は、結縁と供養の証しであった庚申信仰が、江戸後期から集落社会の親睦的な講に変っていくことを如実に語っている。

写真 17. 高本・文化十五年銘庚申塔

8　おわりに

今回の庚申塔調査は、阿蘇郷土研究サークルの悉皆調査や当会の道標調査などの先覚の調査実績を追うフィールドワークで、3 月 28 日から 9 回の現地調査と 2 回のデータ整理を、初心者向け石造物講座を兼ねたグループワークとして行い、風化した崩し字の人名銘文の判読や、拓本取りなどに取り組み、新たな知見も得ることができた。

表 3.の判読した人名銘は、次年度に村方文書や他の石造物の人名などとのつきあわせを行い、旧吉橋村の構造を解き明かす手がかりにしていきたいと思う。

旧村の構造では、高本の享保十一年（1726）銘の塔に「下総国千葉郡吉橋村内高本村」の銘があることと、江戸後期の文化 15 年とその 43 年後の文久元年の 2 基に氏名表示があることが注目される。

吉橋には八千代市内最古の庚申塔や、優れた像容の庚申塔がある。これらを市民に広く紹介する機会を持つと同時に、八千代市の有形文化財として指定対象にしていくことも検討すべきと考える。

参考文献

1. 「睦地区の石造文化財③（吉橋地区）」『よなもと今昔』12 号　1996 年　阿蘇郷土研究サークル
2. 「石造文化財」『八千代市の歴史　資料編　近代・現代Ⅲ　石造文化財』平成 18 年　八千代市史編さん委員会
3. 『続房総の石仏百選』2010 年　房総石造文化財研究会
4. 『千葉県石造文化財調査報告』千葉県教育委員会　昭和 55 年
5. 『志津の史跡と名所』宮武孝吉 平成 12 年 志津文庫
6. 「青面金剛のオリジンをさぐる」大畠洋一　『日本の石仏』No.72　1994 年　日本石仏協会
7. 「生首持ち型青面金剛」大畠洋一　『日本の石仏』No.148　2013 年　日本石仏協会
8. 「印旛・手賀沼周辺の生首持ち庚申の詳細」石田年子　『日本の石仏』No.149　2014 年　日本石仏協会
9. 『写真で見る船橋の庚申塔　青面金剛像 88』大塚武彦　平成 23 年　自家版
10. 「庚申ファイル（2）」多田治昭　『野仏』第 32 集　多摩石仏の会　平成 13 年
11. 『ふるさと再発見　八千代の道しるべ』平成 13 年八千代市郷土歴史研究会

写真 18. 寺台・台座の銘文を探す

写真 19. 高本・万治三年銘庚申塔の拓本を採る

写真 20. 尾崎字芝山の調査